



平成28年度  
山林苗木品評会  
最優秀賞受賞

# ゼロからの出発、試行錯誤の連続

クロマツの苗木づくりは被災農家 30 名で組織する「名取市海岸林再生の会」(以下、再生の会)が担っている。全く経験がないところから始まった苗木づくりだが、宮城県山林苗木品評会にて最優秀賞をいただくまでの力をつけた。県内トップの苗木づくりができるまでに至ったさまざまな苦勞を、再生の会の佐々木廣一事務局長に聞いた。

苗木づくりは、震災があった2011年の秋、のちの再生の会のメンバーとなる 10 名が宮城県の研修を受けることから始めました。研修を終えて登録業者にならなければ苗木の生産や出荷ができないと、法律で決まっているからです。



(2011.12.1 研修を終え  
種苗生産事業者登録)

畑に初めてクロマツの種を播いたのが12年3月30日です。3月中に播くようにと教えられてのことですが、いつまでたっても芽が出ない。一時は「全部腐ったかもしれない。大失敗だ」と覚悟したので、4月の末に発芽を見つけたときは本当にうれしかった。



(2012.3.30 初めての種まき)

実は、同じ宮城県でも海岸に近いと内陸部より地温が低いんです。翌年は、4月10日ごろから雨、風、気温などを細かくチェックして時期を見極め、4月末ごろに播くようにしました。それからはちゃんと、播種後 10 日から2週間で発芽するようになりました。

13年からは畑だけでなくコンテナでの苗木づくりも始め、いまはコンテナだけで育てています。賞をいただいた苗もコンテナでつくったものです。コンテナの方が作業の効率がいいし手間もかからない。海岸に植え替えた後の成長は少し遅いようですが、ほとんど枯れることなく育っています。



(2014.5.2 コンテナでの種まき)

大切なのは「基本」と「工夫」です。種は播く前、水に2、3日つける、播いたあとは種の大きさの4倍の土をかける、というのは基本です。種まきから1年後の夏に行う「空中断根」も、コンテナからはみ出した根を切ってコンテナの中に丈夫な根鉢をつくるために欠かせない作業です。

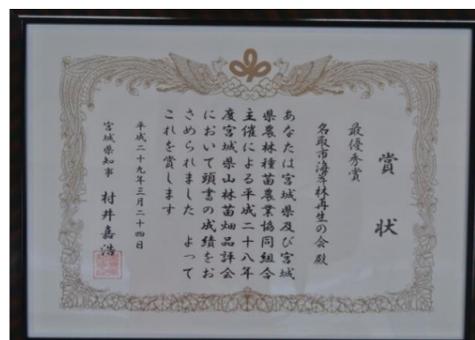
大きくてずんぐりした強い苗をつくるためには秋の追肥が大切ですが、使う肥料もマツ用よりスギ用の方が効果的だと分かってきたし、風や乾燥、虫、日差しなどを避けるため苗に覆いをかけるタイミングもつかめてきた。苗の成長に応じて途中で与える肥料の量を加減して、海岸に植える時になるべく大きさにバラツキがないようにするのも工夫です。

地元のほかの種苗業者ともよくちよく意見交換をし、再生の会でも研修を繰り返していく。その積み重ねが今回の受賞につながったのだと思います。



(2016.2.9 再生の会研修会)

わたしは、賞を取ったのもうれしいのですが、苗を海岸に植える現場技術者が「どこよりもこの苗はいい」と言ってくれるのがうれしい。これこそが私たちの苗の品質証明だからです。



※全国では林野庁長官賞を受賞予定(9月7日の全苗連生産者の集いで表彰)

## INTERVIEW

再生の会の中心メンバーである森幸一さん、大友淑子さん。日々、育苗場で作業にあたるお二人にクロマツの苗木づくりへの想いをオイスカアドバイザーの小林が聞いた。



森 幸一(もり・こういち)  
路線バスの運転手の傍ら兼業農家として農業に携わってきた。育苗場ではメンバーのリーダーとして切り盛りする

種まきから水遣り、施肥、草取り……。苗木づくりを担う再生の会の会員のなかで、いつも育苗場で顔を見るのが森幸一副会長(74)と大友淑子さん(68)。震災後、森さんは町内会の役員仲間に、大友さんは小中学校の同級生に誘われて再生の会に加わった。以来5年半、いま二人は中心メンバーだ。

「まずびっくりしたのは草だね」。森さんには稲作の経験があるが、田んぼは除草剤が使えるのにここではダメ。植物のタネが方々から飛んできて草取りの手間が半端ではない。そして夏場の水遣り。「作業はきつくないけど、炎天下だと体に効いてくる」と笑う。

大友さんも震災前は兼業農家だったが、これまではマツの種も見たことがなかった。何より感動したのはかわいい芽が出てきたとき。「同じ種まきでも年によって天候に合わせて時期を変えなくちゃいけない。野菜づくりとは違うんですね」

苗木づくりは佐々木廣一事務局長のプランにもとづいて進んでいる。「だから仕事は難しい」と二人は口をそろえるが、年月を重ねて手際が良くなったのが傍目にも分かる。加えて、現場を丹念に見回ることが佐々木さんの目になり耳にもなる。「ヨトウムシやシンクイムシなどの害虫に食われた苗に気づいたり、ネズミの穴を見つけたりすることが、すぐ対策につながる」(森さん)からだ。

再生の会の人たちには、未来への手助けをしたいという気持ちが強いという。「ずぶの素人がここまでやってこられたのは、その気持ちがあったから。後になって、昔うちの爺さんや婆さんがやったんだっ

という話になれば」と大友さんが言えば、森さんも「爺さんたちがつくったマツで、10年もすれば木登りができるようになるよと孫に話している」。

森さんは震災で妻を亡くし、大友さんも津波からやっと逃げて翌日夕方にゴムボートで救出された。一変してしまった生活のなかで、苗木づくりは二人の生きがいにもなった。

コミュニティーがバラバラになり、「場所を移して建てた今の家は、自分の家なのに自分の家ではない」という気持ちがどこかにある」と大友さん。そんななか、育苗場が新たな寄合になり、土いじりや仲間のおしゃべりがなんとも楽しいと二人は言う。「みんな5歳年を取って動きは鈍くなったけど、口は変わらないね」、森さんが茶化した。

再生の会には賃金が払われており、仲のいい6人の旅行会も生まれた。「再生の会」は海岸林だけではない、市民のコミュニティーの再生も目指す会だったのだ。



大友 淑子(おおとも・しゅくこ)  
冬季を除き、平日はほぼ毎日育苗場で作業にあたる。女性陣のリーダーとしてメンバーからの信頼も厚い



家業の農作業の合間をみて育苗作業にあたるメンバーもいるが、クロマツの種まきの日は多くのメンバーが集まる。一日の植栽作業を終えた森林組合の現場技術者と共に記念撮影(2017.4.27)

(文：オイスカアドバイザー 小林省太)